

**外国語教育メディア学会(LET)
第82回 (2013年度秋季) 中部支部研究大会**

プログラム

日時： 2013年11月9日 (土) 10:30-19:00

会場： 中部大学 春日井キャンパス

〒487-8501 春日井市松本町1200番地

主催： 外国語教育メディア学会(LET)中部支部

問い合わせ先：

〒487-8501 春日井市松本町1200

中部大学 語学センター

外国語教育メディア学会中部支部事務局 小栗成子

電話：0568-51-6649

メール：支部サイト(<http://www.letchubu.net>)の「お問い合わせ」

Twitter: @LETChubu

日程

10:00	受付	20号館1階ホール
10:00	展示	20号館1階ラウンジ
10:30	開会行事	30号館1階3011講義室
	司会：	犬塚 章夫 (刈谷市立小垣江小学校)
	主催者挨拶：	尾関 修治 (LET中部支部支部長)
	開催校挨拶：	後藤 俊夫 (中部大学副学長)

10:45-12:00	講演	30号館1階3011講義室
	CAN-DOリストを活用した小中高大の英語教育	
	講師：	高橋 美由紀 (愛知教育大学)
	講師紹介：	犬塚 章夫 (刈谷市立小垣江小学校)

筆者等は、「CEFR」が採用した「CAN-DO」リスト形式に則り、日本人学習者のために、英語到達度指標「CEFR-J」を作成しました。「CEFR-J」の学習到達度指標は、language biographyの中で自分の学習目標や学習プロセスのモニター、結果の評価などに用いることができます。また、教材のレベル設定等に基づき、指導のためにも使用できます。

「CEFR」の学習到達度指標は、3レベル (A、B、C) をそれぞれ2つずつの6レベル (A1, A2, B1, B2, C1, C2) に分けていますが、「CEFR-J」は、日本人の学習者は、8割が初級レベルであることから、A1をA1.1, A1.2, A1.3の3段階に、A2をA2.1, A2.2の2段階、さらに、A1の前段階として、Pre-A1レベルを設けています。また、B1、B2レベルも、それぞれ2段階となっています。

今回の発表では、これらのレベル別の特徴と、そのレベルでの「理解 (聞くこと、読むこと)」「話すこと (やりとり、発表)」「書くこと (書くこと)」の5技能の解説とその指導例についてお話ししたいと思います。

12:00-13:15	昼食	
	展示	20号館1階ラウンジ
	見学	19号館2階SI Room

丹羽義信語学センター長 (当時) の「語学習得には自らが学ぶ意識が不可欠である」という思想のもと、1988年に創設された、中部大学語学センターのSI Room (語学専用自習室)。そこでどのような学習が展開されているのか、利用者である学生がご案内します。

13:15-15:30	研究発表	19号館2階192A・B・C・D
	<第1室>	192A-LL教室
	(1) 13:15-13:45 (2) 13:50-14:20 (3) 14:25-14:55 (4) 15:00-15:30	
	司会：	後藤 亜希 (名古屋大学大学院)
		梶浦 真由美 (名古屋大学大学院)

- (1) 英語語彙処理過程における熟達度の影響：音韻・意味処理経路と自動化係数に焦点を当てて

後藤 亜希 (名古屋大学大学院)

- (2) 反応時間データにおける語彙特性効果から見る語彙の即時的運用能力：語長・頻度・親密度・心像性に着目した予備的検討

川口 勇作 (名古屋大学大学院)

草薙 邦広 (名古屋大学大学院)

- (3) 日本人英語学習者の読解における知覚範囲の測定：眼球運動計測を用いた研究

梁 志鋭 (名古屋大学)

杉浦 正利 (名古屋大学)

阿部 大輔 (名古屋大学大学院)

吉川 りさ (名古屋大学大学院)

- (4) 第2言語聴解時における音声速度と脳活性度の関係について：光トポグラフィによる観測

梶浦 真由美 (名古屋大学大学院)

<第2室>

192B多目的演習室

- (1) 13:15-13:45 (2) 13:50-14:20 (3) 14:25-14:55 (4) 15:00-15:30

司会：

田畑 恵 (名古屋大学大学院)

藤田 賢 (三重県立神戸高等学校)

- (1) 英語を媒介としたコミュニケーション活動としての“Shadowing and Summarizing”の有効性に関する一考察

田畑 恵 (名古屋大学大学院)

- (2) 聾学校における英語ゲームを活用した交流活動

鈴木 薫 (名古屋学芸大学短期大学部)

- (3) 中国と日本の小学校英語教育比較—言語政策、教科書を中心に

高橋 美由紀 (愛知教育大学)

朱 炜 (名古屋学院大学院生)

柳 善和 (名古屋学院大学)

- (4) 日本人高校生における「統語・文法知識」「統語・文法処理効率」と「読解力」「読解効率」の関係についての研究

藤田 賢 (三重県立神戸高等学校)

野呂忠司 (愛知学院大学)

<第3室>

192C多目的演習室

(1) 13:15-13:45 (2) 13:50-14:20 (3) 14:25-14:55 (4) 15:00-15:30

司会： 草薙 邦広 (名古屋大学大学院)
黒川 敦子 (名古屋大学大学院)

(1) 第二言語としての英語における単純形副詞のオンライン処理：自己ペース読み課題を用いた予備的検討

草薙 邦広 (名古屋大学大学院)

(2) 自主学習支援講座の取り組み方とその効果

小栗 成子 (中部大学)

Amy Stotts (中部大学)

(3) プロソディによる意味的統語的曖昧性の解消：日本語話者と中国語話者による英語音声産出の比較を通して

田 霜 (名古屋大学大学院)

村尾 玲美 (名古屋大学)

(4) 「言語間の差異」に注目したフォニックス指導の試み：指導結果からの考察

黒川 敦子 (名古屋大学大学院)

<第4室>

192D-CALL教室

(1) 13:15-13:45 (2) 13:50-14:20 (3) 14:25-14:55 (4) 15:00-15:30

司会： 天野 修一 (日本福祉大学 非常勤講師)
古泉 隆 (名古屋大学教養教育院)

(1) 英語聴解クラスにおける授業外学習時間の変動

天野 修一 (日本福祉大学 非常勤講師)

(2) 学習継続に向けたリーディング学習Webアプリケーションの構築

大城 敬人 (静岡大学大学院情報学研究科)

宮崎 佳典 (静岡大学大学院情報学研究科)

長谷川 由美 (近畿大学生物理工学部)

(3) 留学時の言語接触の記録方法について：ランゲージ・コンタクト・プロファイルに着目して

三上 仁志 (名古屋大学大学院)

(4) アカデミック・イングリッシュ語彙学習用mラーニング教材の開発

古泉 隆 (名古屋大学教養教育院)

石田 知美 (名古屋大学教養教育院)

小松 雅宏 (名古屋大学教養教育院)

松原 緑 (名古屋大学教養教育院)

杉浦 正利 (名古屋大学国際開発研究科)

16:00-17:30 ワークショップ 19号館2階192B・D
<第1室> 192D-CALL教室

Rによる言語処理の基本

講師： 阪上 辰也 (広島大学)

本ワークショップの目的は、統計処理環境Rを用いて、基本的な関数による言語データの基本的な処理方法を学ぶことである。言語データとして、日本人英語学習者コーパスのNICEを利用し、データの整形方法から始め、コーパス検索の方法、数値データの集計と可視化までを行う。ワークショップの参加にあたっては、Rの利用経験があることを前提とするが、基本的な操作方法についてはワークショップ冒頭で確認するため、利用経験がなくても参加可能である。

<第2室> 192B多目的演習室

Wake Up: Strategies for Keeping Students Engaged in Language Classes

講師： Amy Stotts (中部大学OPELT)
小栗 成子 (中部大学)

With or without distractions, it's sometimes hard to keep students engaged and attentive to language classroom tasks. In this workshop, simple adjustments to common classroom activities will be explored to promote engagement and attention to important language learning tasks. Integrating friendly competition and movement around the classroom will be demonstrated for their effectiveness in keeping students on task and engaged in language learning activities.

17:30-19:00 懇親会



研究発表概要

<第1室>

発表1 英語語彙処理過程における熟達度の影響：音韻・意味処理経路と自動化係数に焦点を当てて

後藤 亜希 (名古屋大学大学院)

Coltheat (2001)は、視覚提示された単語の語彙アクセスが意味情報に到達する過程に関して、音韻表象を経由する経路、形態情報から直接的に意味表象に到達する経路を仮定している。先行研究では、英語熟達度の違いが語彙処理の過程に及ぼす影響が調査され (e.g., 石川, 2008)、初級学習者は語彙認知の際に音韻処理に頼る傾向があり、上級学習者は両方の処理を並列的に行っていると指摘されている。しかしながら、語彙処理能力の発達は認知速度と正確さだけでは測定できないことが指摘されており (Segalowitz & Segalowitz, 1993)、熟達度と語彙処理能力の発達に関して、さらに多角的な側面から検討が行われる必要がある。

本研究では英語熟達度の違いが語彙処理の過程に及ぼす影響について、同音語ペア、類義語ペアを用いた語彙性判断課題を行い、英語母語話者 (n = 12) と英語上級 (n = 12) ・中級学習者 (n = 12) が、視覚提示された単語処理の際、意味判断と音韻判断の処理をどのように行っているのかを調査した。分析には自動化を測る指標であるCVRTを用いて、語彙処理の速度と正確さ、安定性について検討した。結果、先行研究の知見と反し、熟達度が語彙処理過程に及ぼす影響は見られなかった。

発表2 反応時間データにおける語彙特性効果から見る語彙の即時的運用能力：語長・頻度・親密度・心像性に着目した予備的検討

川口 勇作 (名古屋大学大学院)

草薙 邦広 (名古屋大学大学院)

近年の第二言語における語彙習得研究では、語彙の即時的運用能力 (lexical facility) が重要視されている。語彙の即時的運用能力は、これまで語彙アクセスの速さおよび時間的安定さを以って操作化されてきたが、本研究は、語彙の即時運用能力の発達を、「語彙特性の影響からの相対的独立性」という観点から捉える。学習者の語彙認知は母語話者よりも顕著に、語長、頻度、親密度、心像性といった語彙特性に強く影響されることがこれまでに分かっている。

上記の四つの語彙特性が学習者の語彙認知に及ぼす影響の程度を調べる為に、直交表実験計画を用いた語彙性判断課題を30名の学習者に実施した。個々人の成績に対し、信号検出理論における弁別力を示す指標d', 四つの語彙特性ごとの水準間における反応時間の標準化平均差、および自動化係数 (CVRT) をそれぞれ求め、TOEICスコアや各能力の自己評定値などのデモグラフィックな変数を含めた相関分析を行った。結果として、各語彙特性効果へ対する相対的独立性は、語彙運用能力の発達と連関がある可能性が示唆された。

発表3 日本人英語学習者の読解における知覚範囲の測定：眼球運動計測を用いた研究

梁 志鋭 (名古屋大学)

杉浦 正利 (名古屋大学)

阿部 大輔 (名古屋大学大学院)

吉川 りさ (名古屋大学大学院)

英語母語話者が英文を読む際、1点の注視で視野内の約20文字までの範囲から読解に有用な情報を取得できると言われている (Rayner, 2009)。この範囲は知覚範囲 (perceptual span) と呼ばれ (Rayner, 1975)、読み手の読解能力・速度、読解時の言語情報への注意の配分に関わると考えられている (例：Rayner, 1986)。しかし、こうした知覚範囲に関しては、第二言語学習者についてはほとんど研究されていない。本研究は、眼球運動計測を用いて英語学習者の読解時の知覚範囲を測定し、第二言語読解プロセス解明への基礎的なデータを提供することを目的とする。

実験では、日本人英語学習者24人を対象とし、注視の位置と視覚刺激の呈示を同期させ、読み手の視野に入る英文の文字数を制限・操作するGaze-contingent Moving Window Paradigm (McConkie & Rayner, 1975) を利用した。その結果、学習者の知覚範囲は、従来言われている英語母語話者より狭いことが分かった。これは、母語と第二言語の読解プロセスにおける注意の配分が異なることを示唆する。

発表4 第2言語聴解時における音声速度と脳活性度の関係について：光トポグラフィによる観測

梶浦 眞由美 (名古屋大学大学院)

本研究の目的は、第2言語聴解時に、音声速度の上昇に伴い、脳内の処理活動がどのように変化していくかを光トポグラフィによる脳機能イメージング手法を用いて観測することである。右利きの日

本人英語学習者を対象に、標準速、2倍速、4倍速と速さの異なった合成音声課題を聴かせ、脳内で言語音声理解を担う聴覚野、ウエルニッケ野付近の血流量を半球別に計測した。実験の結果、標準速と2倍速での音声聴解時を比較すると、2倍速音声の聴解時は、右半球では賦活が増加するのに対し、言語野があると言われている左半球では賦活が減少した。速度が速くなるにつれ、言語的処理等を担っている左半球からプロソディ等を処理している右半球への活動のシフトが観測された。また非言語音に近い4倍速の音声聴解時の脳賦活度は、2倍速聴解時よりも減少した。音声速度の上昇による言語の曖昧性の増大に伴い、脳内での処理活動も変化する可能性が示唆された。

<第2室>

発表1 英語を媒介としたコミュニケーション活動としての“Shadowing and Summarizing”の有効性に関する一考察

田畑 恵 (名古屋大学大学院)

本研究報告では、新学習指導要領の目標に沿った言語活動例として、“shadowing” “summarizing” (以下S&S) を挙げ、その有効性を検討した結果について述べる。高校新学習指導要領(外国語)には、「授業は基本的に英語で行う」とされ、現場では教員の多くがとまどいを感じ、指導法や評価法などの見直しが急務となっている。S&S は、聴解能力を始めとする総合的英語力養成に貢献するとされる先行研究(玉井, 2001)があり、教室で手軽に実施できる指導法である。

本研究では、公立高校2年生に、14週間の実験期間を設けて、数種類のS&S に取り組ませて、質的・量的なデータを得た。具体的には、量的データを、①聴解テスト、②会話テスト2種類、③態度面に関する質問紙調査、④定期考査(読解・作文)から、質的データを、“action log”を用いた感想から得た。結果として、上記データ①・②の、聴解力や発話語数に伸びがみられた。さらに態度調査からは、S&S への肯定的感情や、英語への興味が有意に膨らんだことが分かった。

発表2 聾学校における英語ゲームを活用した交流活動

鈴木 薫 (名古屋学芸大学短期大学部)

筆者は、聾学校生徒と大学生との英語ゲームを活用した交流活動を実施してきている。交流活動の取組について紹介をするとともに、聾学校生徒たちを対象に実施したアンケートの結果を分析する。数値データを活動ごとに分析し、相違について検証する。さらに自由記述形式の質問紙調査について、キーワード分析を行い、出現頻度や共起ネットワークから得られる情報によって、活動に対する生徒たちの意識を明らかにする。外部機関との交流による教育プログラムは様々な大学で行われているが、本研究の取組は、大学生と聴覚に障害のある生徒の交流という点でユニークな事例である。交流活動の企画・運営や聾学校との連携、参加する大学生の専門を活かしたESP学習を取り入れた活動についても報告する。本研究では、聴覚障害を持つ生徒たちの評価によって分析を試みているが、本研究の取組以外に実施している障害者支援を目的とした教育活動とその効果の検証法についても紹介する。

発表3 中国と日本の小学校英語教育比較—言語政策、教科書を中心に

高橋 美由紀 (愛知教育大学)

朱 炜 (名古屋学院大学院生)

柳 善和 (名古屋学院大学)

グローバル人材育成を目的とした教育の一つに、初等中等段階での英語教育の充実が求められている。小学校英語は、韓国、中国では「英語」の教科として導入されているが、日本では「外国語活動」であり、教科ではないことから、本発表では、東アジア諸国の小学校英語教育についての事例研究を行う。具体的には、日本、韓国、中国の各国の位置づけ、学習開始年齢、学習時間、学習指

導要領の目標、到達度目標等を概観する。また、これらの言語教育政策が反映している教科書を比較し、東アジア諸国における、初等段階としての英語教育のあり方、とりわけ、中学校へ繋げるための文字指導を中心にして検討する。

発表4 日本人高校生における「統語・文法知識」「統語・文法処理効率」と「読解力」「読解効率」の関係についての研究

藤田 賢 (三重県立神戸高等学校)

野呂忠司 (愛知学院大学)

本研究は、読みの正確さと読みの流暢性に関するコンポーネントスキルアプローチによる先行研究に基づき、「統語・文法知識」「統語・文法処理効率」と「読解力」「読解効率」の関係について検証したものである。日本人高校生42名が参加し、各変数のテストを受けた。「文法・統語処理効率」の測定には、日本人高校生が学校文法で習う項目を精査し、SGJT(時間測定のある文法判断性テスト)を独自に作成した。他のテストは標準テストを利用した。重回帰分析の結果として、「読解力」には、「統語・文法知識」「統語・文法処理効率」ともに影響を及ぼすが、「読解効率」には、どちらも有意な変数とはならず説明力が小さいことが明らかになった。読みの流暢性には、「語彙」や「統語・文法」より下位レベルの知識や処理効率の影響が大きいものと推察された。

<第3室>

発表1 第二言語としての英語における単純形副詞のオンライン処理：自己ペース読み課題を用いた予備的検討

草薙 邦広 (名古屋大学大学院)

現代英語における副詞は、一般的な場合、形容詞の語形に対して接辞-lyを付すことによって派生する。しかし一部の副詞は形容詞の語形のまま副詞として扱われる。これを単純形副詞 (flat adverb) と呼ぶ。この現象は、句の慣習性 (テキスト的関連性)、社会言語学的知識、機能範疇の語彙的表象、そして統語解析の選好性、といった要因が複雑に交錯するため、文処理研究の好例となり得よう。しかしながら、第二言語における文レベルの理解において単純形副詞がどのように処理されるかについて、実証的調査は管見の限り無い。

そこで、本研究は日本語を母語とする26人の高熟達度英語学習者を対象に、自己ペース読み課題 (移動窓式・文提示・単語単位)を行った。刺激は10種の副詞であり、同副詞に対して二条件 (単純形・ly派生形)を設けて、それぞれの読解時間を比較した。

平均差の検定、および再標本化法を用いた区間推定の結果、全体的な傾向としては二条件の読解時間に差が見られなかったが、種々の副詞によって結果が異なることが示された。発表では種々の副詞ごとの結果を上記の要因との連関の中で議論する。

発表2 自主学習支援講座の取り組み方とその効果

小栗 成子 (中部大学)

Amy Stotts (中部大学)

As universities across Japan begin to develop and expand mature self-access study rooms filled materials and methods to help students develop autonomy in learning target languages, Chubu University's Self-Instruction (SI) room has been encouraging autonomous learning for 24 years to over 10,000 students who frequent the SI room in order to engage in independent study to fulfill a variety of English language learning goals. Even with a well-appointed, well-staffed self-access study rooms, independent learners of English have remained in need of additional support to meet their language learning goals. Chubu University's SI room has addressed this challenge by instituting a mentoring program, and more recently, a series of workshops focussed

on independent study topics such as building listening skills through dictation and promoting productive reading. This presentation has a descriptive focus on the evolution of independent language learner support as it has integrated these workshops with already established mentoring systems over the past two years. The topics and formats of the workshops will be shown. The reported success of the workshops will be offered through post-workshop questionnaires and participation statistics. Implications for and benefits of initiating such workshops in other independent study environments will be briefly discussed.

発表3 プロソディによる意味的統語的曖昧性の解消：日本語話者と中国語話者による英語音声産出の比較を通して

田 霜 (名古屋大学大学院)

村尾 玲美 (名古屋大学)

日本人英語学習者にとって、母語以上に複雑な書記素と音素の関係を持つ英語学習には、音と文字とを丁寧に関係づける指導が必要であるといわれる。本研究では小学校外国語活動から中学英語科への移行期に、日本語と英語の音の差異への気づきを促すフォニックス指導の効果を調査した。公立小学校に通う6年生102名を対象とし、週1回の外国語活動の10分程を利用し、7回の帯学習としてフォニックス指導を実施した。指導の前後に、アルファベットネームと小文字のテスト、母音と文字との関連付けや子音の違いの聞き分け等の音素テスト、フォニックスルールの3種類のテストをした。欠損値のない93名のデータから、事前・事後のテストに有意な差が認められた。また、テスト結果の上位・下位群の正答率を調査したところ、下位群の向上が認められた。フォニックス指導の導入は、音素認識力が弱い児童の認識力を高める可能性が示唆された。

発表4 「言語間の差異」に注目したフォニックス指導の試み：指導結果からの考察

黒川 敦子 (名古屋大学大学院)

日本人英語学習者にとって、母語以上に複雑な書記素と音素の関係を持つ英語学習には、音と文字とを丁寧に関係づける指導が必要であるといわれる。本研究では小学校外国語活動から中学英語科への移行期に、日本語と英語の音の差異への気づきを促すフォニックス指導の効果を調査した。公立小学校に通う6年生102名を対象とし、週1回の外国語活動の10分程を利用し、7回の帯学習としてフォニックス指導を実施した。指導の前後に、アルファベットネームと小文字のテスト、母音と文字との関連付けや子音の違いの聞き分け等の音素テスト、フォニックスルールの3種類のテストをした。欠損値のない93名のデータから、事前・事後のテストに有意な差が認められた。また、テスト結果の上位・下位群の正答率を調査したところ、下位群の向上が認められた。フォニックス指導の導入は、音素認識力が弱い児童の認識力を高める可能性が示唆された。

<第4室>

発表1 英語聴解クラスにおける授業外学習時間の変動

天野 修一 (日本福祉大学 非常勤講師)

外国語としての英語学習では、授業時間が非常に限られているため、授業外での学習が成功の重要な要因となる。しかしながら、学習者の自発的な授業外学習を促すことは容易ではなく、周囲のサポート不足も指摘されている。このような状況の打破には、授業外学習活動の性質を深く理解する必要がある。これまで、何をどのように学習しているかについては、方略研究の一環として研究されてきているが、教師がどのように授業外学習を促進できるかを調査した研究は少ない。本研究は学部1年生を対象に、聴解を中心とする必修授業で半期の間、毎週の授業外学習時間の自己報告を収集し、その変動を分析した。その結果、テスト前を除く授業外学習時間の変動の小ささ、文字を読み書きする時間と音声を聴く時間の違い、個人差の大きさ、学習観・動機づけと授業外学習時間の関

連などがわかった。これらをもとに、授業外学習時間の促進に向けた教育的介入のあり方を議論する。

発表2 学習継続に向けたリーディング学習Webアプリケーションの構築

大城 敬人 (静岡大学大学院情報学研究所)

宮崎 佳典 (静岡大学大学院情報学研究所)

長谷川 由美 (近畿大学生物理工学部)

発表者らは非日本語話者、非英語話者を対象に、それぞれ日本語、英語リーディング学習を行うWebアプリケーションREXを開発している。学習者が同アプリケーション上で要求されることは、彼(女)ら一人ひとりの学習履歴を元に自動抽出されたテキストを読み、そしてその難易度を自己評価することのみである。旧バージョンでは、学習者のモチベーション低下を引き起こす可能性が問題点として挙げられた。REXが有するテキストはそのジャンルや長さにおいて多岐にわたるため、無作為に選択されたテキストが学習者のレベルに適合する、あるいは自身の関心を誘うとは限らないからである。それに対し、同アプリケーションが学習者自身の要望に沿うテキストを提供することで学習継続をしやすい環境を提供できると考え、様々な機能が追加された。本発表ではこれまで開発に従事してきたREXの全体像を紹介するとともに、実験から得られた成果ならびに現状の課題を報告する。

発表3 留学時の言語接触の記録方法について：ランゲージ・コンタクト・プロフィールに着目して

三上 仁志 (名古屋大学大学院)

Documenting study-abroad (SA) participants' language contacts is particularly important to understanding the reasons for second language (L2) development in SA contexts and to conducting more productive SA programs. However, it is not always possible for researchers/pedagogues to observe SA participants' moment to moment language contacts, especially when conducting a large-scale and/or long-term piece of research. Thus, the language contact profile (LCP) had been developed in order to record the reality of SA participants' language contact using a questionnaire (cf., Freed, Dewey, Segalowitz & Halter, 2004 in *Studies in Second Language Acquisition*, 26, pp.349-356). This presentation will first summarize the concept of the LCP before introducing the contribution of the LCP by reviewing the findings of prior SA studies. Then, it will state improvable aspects of the current LCP to be used in future studies. Regarding this last point, this study will focus particularly on a means of involving SA participants' emotions toward, and degree of conscious L2 learning within, their language contacts in future application of LCP.

発表4 アカデミック・イングリッシュ語彙学習用mラーニング教材の開発

古泉 隆 (名古屋大学教養教育院)

石田 知美 (名古屋大学教養教育院)

小松 雅宏 (名古屋大学教養教育院)

松原 緑 (名古屋大学教養教育院)

杉浦 正利 (名古屋大学国際開発研究所)

本発表では、名古屋大学で開発中のアカデミック語彙学習用CALL教材の特徴について報告する。

名古屋大学では平成21年度に新しい英語カリキュラムが導入され、アカデミック・イングリッシュの強化が図られており、その一環として本教材の開発を行っている。教材で使用する単語リストの作成には、数学・科学・経済・人文系科目に関してワールドクラスのコンテンツを無料で提供するKhan Academyの動画字幕スクリプトを用いた。また、単語を学習するためのツールについては、

より利便性を高めるために、パソコンのみならずスマートフォンでも利用できる形態（HTML+JavaScript+CSS）となっている。また、様々な形式で単語が学習できるように複数の学習モードを用意し、3択クイズ形式を取り入れるなど、飽きずに繰り返し学習ができるような仕様になっている。発表当日は実際の動作の様子および特徴を紹介する。

賛助会員展示

株式会社内田洋行	http://www.uchida.co.jp/education/
株式会社啓林館	http://www.shinko-keirin.co.jp/
チエル株式会社	http://www.chieru.co.jp/
株式会社アンペール	http://edu.ampere.co.jp/
パナソニックシステムネットワークス 電子システム株式会社	http://panasonic.biz/solution/press/l3stage_ezv.html http://densys.jp

(受付順)

大会参加のご案内

- 会員の方の参加費は無料です。非会員の方は参加費1,000円を受付でお支払い下さい。
- LET会員として入会手続きをしていただきますと、当日参加費から無料になります。また会員は、LET全国研究大会、支部研究大会での研究発表、紀要への投稿などができます。

支部紀要第25号論文投稿受付中

- 今年度の支部紀要（第25号）の研究論文と実践報告投稿申し込み・原稿の締め切りは2014年1月10日です。
- 2012年または2013年のLET全国大会、支部大会、研究部会で関連する内容の発表をされた支部会員は紀要に投稿することができます。
- 申し込みは中部支部サイトの「各種申し込み」からどうぞ。

第83回（2014年度春季）支部研究大会のご案内

- 次回第83回の支部研究大会は2014年5月下旬の予定です。開催地は未定です。
- 研究発表の受付は2014年2月ごろに支部Webサイトにてご案内します。

LET中部支部Webサイト：<http://www.LETChubu.net/>